
七夕おりん～新米同心3人衆の受難～

かれいど すこーぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕おりんゝ新米同心3人衆の受難ゝ

【Nコード】

N3888M

【作者名】

かれいど すこーぷ

【あらすじ】

同心清島安次郎は、ある夜向かいの店に監禁されていたお針子の命を助ける。

しかし、そのためこっそり忍び込んだことが元となり、その店の一人娘との婿入り話が持ち上がる。何とか婿入り話を破談にしようと友人の佐倉一真と、大堀兵庫に相談するうちにある事件と絡んでいくことに気付く。

新米同心三人衆の三本目です。どうぞよろしく願います。

序幕 其の一

あれが天の川

あれが牽牛星

あれが織女星

ふたりは年に一回この大きな川をわたって
年に一回逢瀬を遂げる

けれど下界じゃ

年中一緒なのに

同じところにすんでるのに

どうしようもなく好きなのに

手さえもふれられない男女がいる

あにさまはあの夜、そうおっしゃった

りん

おりんよ

あにさまが犯した罪はお前のせいだ

この血染めの刀も

この血染めの着物も

全部お前が悪いのだ

あに様の断末魔が聞こえるか

最期まで

最期までもあのように

ほうれ

お前の名前を呼んでいる

血染めの兄の罪を継ぐのだ

それが残されたお前の償いだ

序幕 其の二

夜も更けておりんは窓を開けた。

風がおりんの降ろしたままの黒髪をふわりと広げた。

時は既に夜九ツを廻り、見下ろす日本橋界限を歩いているものは誰もいない。

空を見上げる。月の出ていない空は満天の星だった。

もう三月もすればまたあの命日がやってくる。

おりんはそつと天の川に手を合わせた後、星明りを頼りに窓から身を乗り出すようにして裁縫を始めた。

ここの栄屋に引き取られてもう9年になる。

ほとんど部屋から出されることもなく毎日縫い物だけを朝晩なくやらされている。

17歳という年頃の女には誠につらいことではあったが、仕方のないこととおりんは思っていた。

目の前の3間程の路地を挟んで、円満屋という呉服屋がある。

同業とはいえ、栄屋とは比べ物にならないくらい規模が大きい。長女が武家に嫁ぎその孫は町奉行所に勤めていた。

安次郎というその侍がよく出入りをしている。

しばらくして、円満屋側の屋根裏の窓が開いた。

星明りでぼんやり顔がみえたときそこにいるのが当の安次郎であることに気づいた。

安次郎は煙草をふかりとふかす。

伊達男の代表格。日本橋ではそう呼ばれるほど、安次郎は粹で若い

女に人気がある。

安次郎はおりに気付いたらしく顔を向けた。

おりんは恥ずかしくなり目を伏せる。

そうつと目をあげると、安次郎はまだおりんを見ていた。

おりんに向かつて手を振っているのがわかった。

おりんは小さく手を振り替えた。

暗くて相手の顔はよく見えないが、安次郎はそれで満足したようだ。煙草をまたぶかりとくゆらせ始めた。

おりんも裁縫を続ける。

そのとき手からはさみが滑り落ちた。

はさみは急斜になっている庇を滑り落ち、瓦に引つかかってしまった。

「とらなくちゃ」

おりんは窓からそつと外に出た。

黒い垂髪が風に巻き上げられ、首に巻きつくいびつな鉄輪をあらわにする。

その先に繋がれている鎖がじゃらり、と重い音をたてた。

第一幕 清島安次郎の受難 其の一

清島安次郎は、友人の佐倉一真の家で傘張りをしていた。既に傘は部屋一面を覆うほどできあがっている。

「何で、俺の家で」

一真はボソリとつぶやいた。

「だって、兵庫さんのお家は少し小さめだからたくさん作れないじゃない。一真さんのうちだとお部屋もあまってるんだし、どうせ非番で暇なんですよ」

休憩用の冷茶をもってきた沙代が一真に答えた。

端正な顔立ちの一真と、愛くるしい沙代は一つ違いの従兄妹同士で兄妹のような付き合いがある。

「助かったよ、沙代ちゃん。一真ったら俺の頼みは聞いてくれないくせに沙代ちゃんの頼みはきくんだもんなあ」

傍で糊を混ぜていた狸顔の男が言った。大堀兵庫である。

この内職は、この兵庫の持ってきたものだ。

兵庫は、八丁堀の家を売り町人たちの住む長屋で暮らしている。

簡単な話が貧乏なのだ。生計を立てるため俸禄で足りない分を内職で補っている。

3人は町奉行所勤めの悪友だった。

「兵庫さんは偉いわ。一人で家を切り盛りしていらっしやるんですよ。少しくらい私もお手伝いさせてくださいよ」

もじもじとそいいいながら沙代は頬を赤らめた。

可愛いのに、兵庫なぞが好きだなんてもったいないな、と安次郎は思うのであった。

冷茶を飲みながら小休止をしていると、来客の声がした。

沙代が玄関先を見に行くと、そこには可愛らしい少女のような顔をした袴姿の子供が立っていた。

「ここに清島安次郎と申す男がきてはおりませぬか」
礼儀正しく挨拶したその子は男の子であった。

「かわいい」

思わず沙代が頭を撫でる。

すると、子供は顔を真っ赤にしてぶうつと膨れた。

「武士に向かって可愛いは失礼であろう」

「おちさじゃないか」

様子を伺いにでた安次郎が言った。

子供は知三郎といい10歳になる安次郎の弟であった。

「おちさ言つな、知三郎じゃ。お前に忠告にきた。今日は家に帰らないほうがいい。家の中は大嵐だぞ」

女の子扱いされることが嫌らしく可愛い顔で兄を睨んだ。

「何がお前だ、偉そうに。俺が何かしたか」

安次郎は小生意気な知三郎の頭を小突いた。

「不埒者の兄だとは思ってはいたが、これほどまでとは思わなかった。父上も母上もご立腹だ。じいさまため息をついていたぞ」
思いつきり兄を睨む。

「だから、なんだっていうんだよ」

へらへらと笑いながら安次郎は茶を飲む。

「その、なんだ。そんなふしだらな・・・」

知三郎は真っ赤になりながら口ごもった。

やがてきつぱりと顔を上げて兄の悪行を言い切った。

「お前、孕ませたろっ！」

安次郎は飲んでいた茶をぶつと吐き出し、それは向いに座っていた一真にもろにかかった。

驚きのあまり二の句が告げない。

「栄屋の旦那と娘のお園さんが昨日円満屋のじいさまのところに来たんだ。それで、お園さんが妊娠している、相手はそちらの血縁の安次郎様だといったそうだ。見損なつたぞ、商売敵の娘を手籠めにするなんて」

知三郎はそういつて兄をまた睨む。

「どこまで見境ないんだ、お前は」

一真が顔を拭きながら言った。

「すげーな、妊娠かあ。色男は違うなあ」
兵庫も感心している。

沙代は軽蔑するような顔で安次郎を見た。

安次郎は真っ青になり慌てて弁解する。

「違う。違うって。俺はそんな失敗しないし、第一栄屋の女なんて

手を出すはずがないだろ・・・あっ」

突然、安次郎は思い出したように声を上げた。

「手、出したというか」

清島安次郎の受難 其の二

3ヶ月前の話である。

安次郎は祖父と一緒に日本橋人形町にある茶屋で遊んだ後、夜も更けたのでその日は円満屋に泊まった。

円満屋の2階の上には屋根裏部屋があり、安次郎はそこを煙草をふかしたり、付文を読んだりするくつろぎの場に使っていた。その夜もそこで煙草をくゆらそうと窓を開けた。

すると向かいの栄屋で垂髪の女が薄暗い星明りの下、縫い物をしていた。

「可哀想に、こんな時間まで働かされて」

安次郎は女に手を振った。

始めは無視していた彼女もやがて手を振り替えてくれた。

安次郎はそれに満足してまた煙草を吸い始める。

そのうちに、女が何か落とした気配に気付いた。

窓から外に出てそれを拾いに向かっている姿が見える。

かなり足元がおぼつかない。

「危ないな」

安次郎も心配そうにその様子を見る。

そのとき、彼女の降ろした髪の中からいびつな光を放つ線が部屋の中から伸びているのに気付く。目を凝らし、思わずぎよっとした。

鎖が首に繋がれている。

「足滑らせたら死んじゃう」

安次郎は部屋から飛び出し、女のいる庇へ向かった。

安次郎が塀を乗り越え、屋根づたいに女のところにたどり着いたとき、ついに女は足を滑らせた。

屋根にしがみつきもがく女を安次郎は抱え上げ、そのまま部屋の窓まで連れて行った。

驚くほど体の軽い女だった。

「大丈夫か、あんた」

窓の縁に座り安次郎は女の無事を聞いた。

女は黙ってうなずく。

「なんだって、こんな鎖なんか・・・」

鎖をジャラジャラならした。

女は首を振った。

「いいの、気にしてないから」

「気にするとかの問題か？夜中まで仕事させたり、首に鎖なんて俺が組合に文句言ってやる」

安次郎が苦々しげにつぶやいた。

女はそれを聞くなり血相をかえ「だめっ」と安次郎に向き直る。

黒い瞳に長いまつげ、唇はさくらんぼのように艶がある。
美しい娘であった。

「お願いだから、ほっておいて。私はこのままでいいの」
うつむいたその目には夜露のような涙が光っていた。
その可憐で儂い様子は幻のように思えた。
夜空に吸い込まれ消えてしまいそうだった。

安次郎は思わず抱き寄せた。

そのまま女に顔を寄せるとその唇に、唇を重ねた。

「接吻したあ？」

兵庫がすつとんきょうな声を上げた。

「安次郎さんって、ほんの数回言葉を交わしただけの相手とも接吻できるんですね」

沙代が軽蔑に侮蔑をこめた声で言った。

「いや、ついうっかりというか。幻かどうかわからなくなってさ。
まだ酒も残ってて」

安次郎が冷や汗をかきながら言い訳をする。

「本当に接吻までなのか」

一真が冷茶を飲みながら尋ねる。

「一真まで・・・」

安次郎は途方にくれた顔になった。

「やっぱり覚えがあつたか、見損なつたぞ。栄屋はお園さんとお前を夫婦にして栄屋を継がせるつもりだ。吾は清島の家を継ぐ覚悟はいつでもできておる。お前は一日頭を冷やして婿養子に行く覚悟を

つけるんだぞ」

知三郎はふんぞり返って言った。

「おちさ、てめえ。後で泣かしてやるからな」

ぎりぎりと青筋を立ててそういい残すと安次郎は家へと駆け出した。

清島安次郎の受難 其の三

はたして家は大騒ぎであつた。

母の清重は安次郎を見るなり、背中をぽかぽかと叩いた。

「この馬鹿息子！よりによつてお松の娘とだなんて。あんな性悪のところは婿養子に出さなきゃいけないなんて、あんたなんか産まなきゃよかった」

そういつて夫の胸に飛び込むと、おいおいと泣く。

清重は、もとは町娘なので気を抜くと遠慮のない蓮っ葉な口調になる。

父は母を抱きとめ、落ち着きなさいとたしなめた。

「私は、お園さんとは会つたこともありません」
母に向かつて弁解するように言つた。

「うそつ！だつて栄屋の丁稚があんたが忍び込んでくるのを見たつていつているわ。屋根を伝つてぴょんぴょんと」

清重は手振りを沿えて話す。

安次郎は見られていたことに内心苦い顔をした。

「忍び込んだのは確かなのだな」
それまで黙っていた父朔太郎が問う。

「はい。しかし、それは人の命を救うためで決して不埒なことを行つものではありません。栄屋には首を繋がれ、夜中まで労働させられている女がいたのです」

安次郎はその夜の事をかいつまんで父に説明した。

安次郎の父もまた奉行所勤めであり物の道理はわかっている。少し考え込んでから安次郎に言った。

「栄屋は、跡継ぎが辻斬りにあつてからというものの評判がよろしくない。特に後妻に入つたお松は奉公人を奴隸のように扱うらしいな。お前のいつていることもまんざら嘘ではないかもしれない」

しかし、とつけくわえる。

「お前はそういうところがだらしのない面がある。宗兵衛殿と一緒に栄屋に行つて事情を話しなさい。やましいことがないのなら本人たちの目の前でも訳を話せるよな」

安次郎は罰が悪そうにうなずいた。

その後すぐに安次郎は祖父の円満屋宗兵衛とともに栄屋を訪れた。

祖父の店である円満屋は6代続いている老舗の呉服問屋だ。

規模でこそ大丸や越後屋には劣るものの、その売り上げや顧客力は界限では一、二を争う。

売り上げの面で他の店に遅れをとっている栄屋にとっては大きな商売敵と手を組むことは願つてもないことだろう。

「お前が婿にいくことになったら、少し客を回さないといけないだろうな」

少々太ったその体を揺らしながら苦笑交じりにそうつぶやいて、栄屋の暖簾をくぐった。

「まあ、安次郎様。お久しぶりです」

店先で安次郎達を出迎えたのは当のお園であつた。

色は白いが、顔立ちはきつく勝気な様子が伺える。

「お前に会ったことはないと思うが」

安次郎が冷たく言い放った。

もつとも、この男は女に甘い。

本人が冷たいつもりでも聞いているほうはそんなこと微塵も感じない。

「やだ、しらばっくれないで」

鼻にかかった甘い声でそういうと安次郎の手を取り奥の間へいざなった。

「おつ父さん。清島様と、円満屋様がいらっしゃいましたよ」
弾んだ声でお園は父に呼びかけた。

部屋には栄屋の主人、栄屋太郎衛門が座っていた。
にこにこ商売人らしい笑みを向けているが、どこか覇気がないのは娘の妊娠騒動に振り回されているからだだろうか。

安次郎は一度咳払いをして気合を入れると、栄屋に忍び込んだあらしを説明した。

とくに垂髪の女については栄屋の奉公人の扱いも疑うようなひどい扱いだと付け加える。

しかし、栄屋は首をかしげた。

「不思議なことをいいなさる。今我が家にいるのは五人の奉公人です。その五人とも垂髪でもないし、ましてや監禁しているだなんて」

「安次郎様は勘違いなさってるわ。私が風邪で寝込んでた頃の話ですもの。その時に私が髪を降ろしていたからでしょう。」
お園はそういつて笑った。

安次郎は祖父をちらつと見た。

宗兵衛も曇った顔で安次郎を見ている。

どうやら安次郎の勘違いを疑っているようだ。

このままでは夜這いをしたことになってしまう。

安次郎に嫌な汗が流れた。

そのときタン、と襖を開けてお松が入ってきた。

「途中から口を挟んでしまって申し訳ないですけど、なんならお調べいたしませんか。うちに隠しごとなど全くありませんし、何せ清島様はうちの婿になるお方ですもの。気の済むままにお家を案内いたしましょう」

お松はお園よりも勝気な顔をして微笑んだ。

その微笑の下に射抜くような鋭い光を見た気がした。

第二幕 栄屋の秘密 其の一

安次郎はとぼとぼと八丁堀を歩いていった。

結局、縁談は破談にはならずそのまま進んでしまった。

このまま家に帰るのは嫌だった。

母から夜這い魔呼ばわりされるのはもちろん、知三郎が当主と偉そうにするのも耐えられそうにない。

仕方なく一真の家に向かった。

「あら、夜這い魔が来たわ」

一真の家で夕飯を作っていた沙代が言った。

「夜這い魔はやめてよ」

安次郎はため息をついた。

「このままじゃ俺、婿養子だ」

一真の据わっている茶の間に上がりこんだ。

「垂髪の君はいなかったのか」

一真が言った。

「何だそれ？」

「源氏物語みたいで素敵でしょ。それとも接吻の君のほうがいいかしら」

茶を運んできた沙代が口を挟んだ。

「なんでもいいよ、とにかくあの娘は隠されていた」

安次郎はお松に促された事を渡に舟とばかりに家中を探し回った。ようやく件の部屋へたどり着いたのだが、そこはガランとした物置だった。

誰かが使っているような様子もない。

「そんな・・・」

幽霊でも見たのでしょうか、と付き添っていたお松は笑いながら言った。

安次郎は窓を開けた。向かいに円満屋が見えた。

酒の勢いも借りた夢だったのだろうか。

そう思つてふと下を見下ろしたとき、はさみが庇に引っかかっているのを見つけた。

同時に、窓枠の鎖が擦れた後にも気付いた。

彼女はいる。

この家のどこかに隠されている。

「でも鎖の跡だけじゃどうしようもない。結局それだけだった」
安次郎がため息をついた。

「栄屋のことだけだな」

不意に一真が話し始めた。

「あそこの息子、七太郎のことだ。十年前に辻斬りにあっている。下手人は木山小次郎、一刀流の使い手だ。七太郎以外にも三人斬っている。その後捕まって小次郎は磔。その両親は責任を感じて自害した。妹もいたがこれは生きている。街道沿いの農家に引き取られ

たらしい」

「調べてくれたのか」

安次郎はまじまじと一真を見た。

「お前が婿に行ったらつまらなくなるからな。兵庫は今、務めにいっているが岡っ引き達に栄屋の事を聞いてもらっている。それより、気になることがあるんだ」

一真は、刀を振るような仕草をした。

「一人目から三人目は、背中なり胸なり一気に切っている。これはためらわずに一気に斬り込んでいる。実に剣の使い手らしいやり口だ。でもな、最後の七太郎についてはちよつと違うんだ。心の臓をさしている。それまでのやり方とは違うんだ」

「一刀流だつて突きくらいあるだろ」

「そうじゃない。刀を持っていない町人なんて斬る方にしてみれば腹出して寝ている猫みたいなものだ。刺すなんて地味で逃げられそうなことするよりも思う存分斬りつければいい。それに刺したのも背中までは貫通していない。短いものだな。懐刀みたいな」

「辻斬り、じゃない」

安次郎がごくりと喉を鳴らした。

一真はうなずいた。

「帳面上、これが辻斬りになっているのは、木山自身が白状したからだ。けれど、木山は随分いいかげんなことを言っていたという記録も残っている。この証言も疑わしいものだな」

そこへ公務を終えた兵庫が戻ってきた。

「安次郎、来てたのか。丁度いいや、岡っ引きの銀さんが、栄屋の若旦那のことを覚えていたんだ。何でも殺されたのは二十歳だった。栄屋はやりきれないだろうなあ」

そういつて安次郎の横に座ると、仕入れた情報を話し始めた。

十年前の栄屋は、主人と前妻のお且、それに跡継ぎの七太郎の家族三人と奉公人数人で切り盛りをしていた。

小さいながらも家族仲も良く伸び代のある店でそれなりの繁盛をしていた。

ただ一点の曇りといえば、太郎衛門がよそに妾を囲っていたことである。

それがお松、間に生まれたお園はその時六歳であった。

夫婦はこのことになるといつも喧嘩になった。

そして、あの事件が起きた。

その日、お松に金を工面してやっていた太郎衛門はそのことがお且に見つかりそうになりやむを得ず七太郎に持っていくように頼んだ。腹違いとはいえお園を可愛がっていた七太郎は快くそれを引き受けたのだが、その帰り道で辻斬りにあったのだ。

夫妻の悲しみは大きかった。

ことにお且はひどかった。

半狂乱になり夫を責め、お松を責め、自分を責めた。拳句に四十九日を待たずして首をつつたのだ。

太郎衛門は人が変わったように暗くなった。

毎日呆けたように部屋に閉じこもり、商いをすることもなくなった。栄屋は終わりだ、と誰もが思った。

しかし、そこにお松が現れた。

傾きかけた店をてきばきと建て直し、呆けた太郎衛門の世話を甲斐甲斐しく焼く。

心配していた親戚や奉公人はほっと胸をなでおろした。そして、皆に望まれてお松はお園を連れて後妻へと入ったのだ。

「へえ、あの太郎衛門がねえ」
あの笑顔の裏に壮絶な過去があったものだ、安次郎は太郎衛門のニコニコと笑っている顔を思い出していた。

「でもね、それからがひどいんだ。妻の座を手に入れた瞬間から手の平を返したように、奉公人につらく当たる。朝晩なく働かされて、飯も少ない。次々に辞めていって当時から残っている人は誰もいないよ。新しく入っても、半年も待たずに出て行くんだって」

「奉公人をいびるのは感心しないな。安も婿にいったらいびられるかも」

からかうように一真が安次郎を見た。

「よせよ。でも、その噂どおりならあの娘の鎖も労働も合点がいくきつと、今もひどい目にあってるんだろうな」

同情をするように安次郎がつぶやいた。

「お前がそんなに入れ込むなんてな。美人なのか」
一真が少し興味深げに尋ねる。

「美人だ。お園なんかよりもずっと。おまけに大人しいし可憐だ」

力説する安次郎に兵庫がぷつと吹き出した。

「それだけ記憶がしっかりしてるなら、見間違えてもなさそうだな。」

明日は非番だから俺、栄屋を見張っとくよ。もしかしたら何か手掛かりがあるかもしれないし」

栄屋の秘密 其の二

翌日、兵庫は店の裏の路地に立っていた。

表はにぎやかで繁盛しているが、裏に回れば通夜のように静かだった。

時折、塀の向こうから厳しい命令や激しい叱責が聞こえてくる。

「こりゃあ、逃げ出したくなるわけだ」

兵庫がそう思うほど暴力的な口調だった。

なおも兵庫が苦い顔をして腕を組んでいると、裏口から若い女が泣きながら木戸を開けた。

小さな荷物を背中に背負い小走りに店を出て行く。

兵庫はその尋常じゃない泣き方に思わず声をかけた。

「もし。いかがなされた」

兵庫の人懐っこい狸顔が、女に優しく響いたようだ。

「今しがた、奉公先を首になったのです」

女はぼろぼろ涙をこぼしながらそういった。

兵庫は茶屋の縁台に腰掛けて、おたみというお針子に団子を奢ってやった。

「何で首になったのさ」

「お園さんが、自分の着物のほころびをお客さんの繕い物より優先

しろって聞かなくって。

だけどそれを断ったら怒ってしまったってお松さんに告げ口されて首、ひどいでしょ。でも、首にならなくてもあんな店もう耐えられないけど」

鼻水をすすりながらおたみは言った。

「お針はおたみさんだけなのかい？」

兵庫は聞いた。

「私と通いのおばあさんが一人いるわ。それだけよ」

おたみは、団子をほおばり答えた。

「その、首を繋がれた垂髪のお針なぞはいない？」

思い切って聞いてみた。

「何それ、お化け？」

おたみは怪訝な顔で一蹴した。

「私たちだけじゃ受けきれない分は、旦那様がやってくれるわ。さすがに長く呉服屋をやっているだけあって早いしそれは上手なの」

でもねえ、と付け加えた。

「あのお松とお園はそのところは点でだめね。人を使うこと、金を稼ぐことは旦那様以上だけど。特にお園。安次郎様に見初められたなんて絶対嘘。あんな性悪が安次郎様にほられるはずがないわ」
茶で酔ったのかと思うくらい、おたみは憎まれ口を叩いた。

「それにお園は妊娠なんてしていない。でっち上げてるの。月のものだってちゃんと来てるのよ。私、知ってるんだから」

そういったところでおたみは、自分が人知れず恥ずかしい話をして
いることに気付いてハッと顔を赤らめた。

そんな様子を兵庫は笑顔でうんうんと相槌をうつ。

しかし内心は思わぬ情報に、えええーっと驚いていた。

栄屋の秘密 其の三

「上野の笹屋でまつ」

安次郎からその知らせを受けてお園は浮き足立っていた。

笹屋は上野に多くある水茶屋の一つだ。

恋人たちはここで逢瀬をする。

お園は待ち合わせよりもずっと早く笹屋の部屋で待っていた。

自分の犯した悪戯がばれていることなど露程も知らずにただ浮かれていた。

日の当たりの悪く薄暗い茶屋の小さな一室で安次郎を待っていると、すつと後のふすまが開いた。

「安次郎様」

満面の笑みと期待をもって振り返った。

しかしお園の目に映ったのは安次郎だけではなかった。

「お手柔らかに頼む、な」

苦笑しながら、後ろにいた一真に手を合わせた。

その安次郎を後ろに押しやると一真がお園に迫った。

「よくも俺の友人をだましたな。貴様、自分の立場をわきまえずにでっち上げをして武士の身分を辱めてくれた。無礼打ちにしてもいいくらいだ」

そういつて一真が鯉口を切った。

「ひっ」お園が短く悲鳴をあげた。

「お前の妊娠を嘘だと証言しているものがいるんだ。なおも妊娠していると言い張れるのであれば、今すぐ腹を裁いて確認してもいいぞ」

刀をすつと抜く。

その目には情も容赦もない殺意のみが浮かんでいた。

お園は全身を振るわせた。

「ご、ごめんなさいっ」

喘ぐようにお園は言った。

「ごめんなさい。全部嘘なんです。だって、おりんがいけないのよ。使用人の分際で安次郎様に手を出すから」

安次郎が傍によってお園に問いかけた。

「あの娘はおりんっていうのか。どういう娘なんだ。何故隠している」

お園は首を振った。

「わからない。でも9年前におつ母さんが連れてきたの。きっと、おつ父さんが自分の縫い物を全部おりんにさせていることが分かったら面目が立たないから隠してるんだわ。私はそのおりんが隠れて安次郎様と逢瀬をしているのが許せなかったの」
そういつてお園は泣き出した。

3ヶ月前、お園は物音に目を覚ました。

すぐ上のおりんの部屋から声がする。

いぶかしんで庭に廻っておりんの部屋を見上げてみたら、円満屋の安次郎と二人で接吻をかわしていた。

星空を背にした二人の姿は一瞬見とれるくらい美しい図であった。思わず部屋に駆け込み安次郎の気配が消えるまで息を殺していた。

しかし、後から湧いた感情はおりんに対する激しい嫉妬であった。

お園はおりんの部屋にかけこんだ。

「今夜のことは忘れなさい。安次郎様が逢瀬に来たのはお前ではない。私なの。日陰の身で男をたらしこんでるなんて知れたらあんただって唯じゃすまないわ。これはあんたにとってもいい話でしょ。だから、今日、安次郎様と逢瀬をしたのは私。あんたはそれを見ていただけ」

おりんは、なにもいわずただ首をたてに振った。

次の日早速お松におりんの部屋の下にすることが不満だと文句をつけ、おりんを隠す部屋を変えてもらった。

これで安次郎ともう会うことはないだろうと、お園はそう考えた。そしてそれだけに飽き足らず今回の妊娠騒動を起こしたのだ。

丁稚が、安次郎が塀を越える様子を見ていたこともあってことのほかうまく進んだ。

「そこまでして俺と一緒になりたかったのかよ。腹も大きくならなきゃいけないだし、いずれは分かることだろ。どうかしたら町方やってる清島の家も円満屋も敵に回してしまうんだぞ」
安次郎はあきれた。

「祝言さえすんでしまえばこっちのものだと思ってました。子供は結局だめだったと言おうと思ってました」

泣きじゃくりながら、ごめんなさいと繰り返すお園を安次郎は少し

かわいそうだと思った。

水茶屋を出て安次郎は「刀を抜くのはやりすぎだ」と一真に言った。

「お前は女に甘すぎる。あれもこれもと、女を欲張るからそうなるんだ」

「欲張ってなんてないさ。でも、女に泣かれるのはどうも弱い」
安次郎が頭をかいた。

そんな安次郎の背中とバンと叩いた。

「しっかりしろよ。これからおりんという娘を洗うぞ。ひょっとしたら捕り物になるかもしれない」

「捕り物だつて？」安次郎は驚いて聞きなおす。

「まず女衞を当たるぞ。どうせまともな口入屋に言ってもおりんなって名前は出てこないだろう」

いぶかしむ安次郎を見て一真は涼しい顔で言う。

「女衞の美人を見出す目はすごいからな。美人なんだろ、その娘」

第三幕 捕り物 其の一

栄屋の暖簾を三人の同心が十手を携えてくぐったのは夕暮れ六ツである。

「ど、どうなさいましたか」

店を閉める準備を始めていた太郎衛門はその物々しい姿に驚いた。その声を無視し、先頭に立っていた安次郎がずかずかと上がりこむ。

「おりん、どこだ！」

太郎衛門が後を追いつがろうとしたのを一真が止めた。

「直、奉行所のほうから与力も着く。おりんがこちらにいることはわかってるんだ。大事な証言者だからこちらにお引き渡しいただこう」

「ですから、おりんなんてうちにはいませんよ」

太郎衛門を上目づかいに見ながら兵庫が言った。

「九年前に女衞屋から子供を一人買った。奴さん言っていたよ、花魁になれるくらいの上玉だったのに呉服屋なんぞに売っちゃまった、ってね。どうだい、弁解できるかい？」

太郎衛門の顔はさあつと青ざめた。

「あ……」

「何ですか、この騒ぎは」

奥からお松とお園も出てきた。

お園は先日証言からこの捕り物になったことを悟り、倒れそうなくらい真っ青になっていた。

「いくらお役人様でもこれはあんまりでしょう。勝手にずけずけと上がりこんで押込みみたいなことをして」
お松は甲高い声で叱責をした。

「探されるとまずいことでもおありか。おりんという娘がいなくていうのであれば存分に探しても差し支えないでしょう。それともお内儀には別のやましいことでもおありなのか」

一真の言葉にお松はぎりぎりど歯軋りした。
そしてお松は家中に聞こえるような声で叫んだ。

「ようございましょ、存分にお調べなさいませ！けれど、おりんなんてものはおりませんよ。呼びかけても誰も返事などいたしませぬから」

影から見守っている奉公人たちがびくりと怯えるのが見えた。
この声で、この家の恐怖政治を行っているのだ。

一真は内心苦い顔をした。
お松のこの言葉でありんは安次郎の声を無視するかもしれない。
長く監禁が続けば、恐怖に支配された主従関係は逆に強くなるからだ。

一真は、十手をお松の首に当てた。
「これ以上、声をあげることは許さんぞ」

その眼力の強さに射すくめられたかのようにお松は押し黙った。

一方、安次郎は十手を手に、部屋という部屋を探し回っていた。

物置や納屋、地下にある納戸も探した。しかし古い鎖の後はいくつかあるもののいずれも空振りであった。

しかも、先ほどのお松の声が家中にとおっている。

その声に牽制されてか、これだけ呼びまわっているというのに声も上げてくれない。

「おりん」安次郎はもう一度叫ぶ。

安次郎は主人夫妻の寢所に入った。

「おりん、俺だ。安次郎だ。声を上げてくれ」

一声でいい、頼むから返事をしてくれ。

安次郎は願った。

そのとき、じやらりと鎖の音がした。

「ここでございます」

か細い声が壁の中から聞こえてくる。

「おりんは、ここでございます」

安次郎は、壁に耳を当てた。そして鏡台でふさがれている扉を見つけた。

「隠し部屋か」

鏡台をずらして壁の扉をこじ開けた。

そこには小さな天窓から入る薄明かりに照らされた、あの垂髪のおりんが座っていた。

「おひさしぶりです」

おりんは少し笑みを浮かべて言った。

安次郎は、おりんの手を取っていった。

「おりん。お願いだ。あんたの証言が必要なんだ。十年前の栄屋の跡継ぎが死んだ日、その日のことを教えてくれ。じゃないと俺たちが罰せられる」

実は大見得きつて乗り込んだはいいが全くの無謀であつたのだ。

古い事件で証拠が少ない上に既に解決済みの事件である。

掘り起こして奉行所に無理を押しして今回の捕り物の手配をしたのであつた。

「あんたを助けにきたはずなのにそれとは別の事件をみつけたんだ。もう一度、あの夜のことを証言してくれ」

頼む、と頭を下げた。

おりんはこれを聞いて真っ青になった。

「だめっ。そんなことをしたら、栄屋がつぶれてしまう」

「義理立てするような店か、あんたを監禁してるんだぞ」

おりんは自分の両肩を抱えうつむいて押し黙った。

恐怖しているようにも迷っているようにも見えた。

「約束する。俺が護つてやるから。あんたを解放したいんだ」

安次郎はおりんの顔を覗き込んだ。

まっすぐに見つめる視線におりんは、視線を逸らして身を硬くした。しかしやがて安次郎に向き直った。

「わかりました。でも太郎衛門様はお咎めなさらないと約束ください」

おりんはそういつて立ち上がった。

壁に打ち付けてある鎖が引き抜かれると、おりんは自らの足で主人たちのいる店先へと歩んだ。

捕り物 其の二

二人が店先にでたときには与力の中尾、吟味方同心の板倉が既に到着していた。

中尾はおりんを見ていぶかしんだ。

「なんだ、その女は？おい清島、詳しく説明しろ」

しかし板倉が「あつ」と声を上げた。

「十年前の、あの木山の妹か。いや、当時からきれいな娘であつたがこんなところにいたとは」

板倉は吟味方の熟練だつた。

当時、聴取を行ったおりんのことを思い出したようだつた。

「まさか被害を受けた栄屋で奉公していたのか。それにその首。その瘦せよう。栄屋お前、木山のことを根に持って虐待をしていたのではないだろうな」

板倉は厳しく詰問した。

太郎衛門はぶるぶると震え出した。

その時おりんが前に出た。

「そのようなことはございません。これは私が望んだことです」

おりんは太郎衛門を見ながらそう答えた。

太郎衛門は目を見張っておりんをみる。

おりんは笑みを浮かべそれに答えると土間に立っている中尾に言った。

「十年前の辻斬りについて申したい儀がございます。兄は辻斬り、それは間違いございません。けれど、兄は七太郎さんを切ってはおりません。兄はその夜、家にいたのです」

実は、十年前の聴取のとき一度だけそれを証言したのだ。

この証言は本人の自白によって結局取り上げられることはなかったが記録には残っていた。

一真は、七太郎の辻斬りについて調べていたとき目ざとくそれを拾ったのである。

おりんと木山小次郎はこの日、庭で星を見ていたのだ。

満天の星の中、恐れられていた辻斬りの兄と肩を並べて父母すら知らないことであつた。

「木山は少なくとも三人は斬っております。しかし証言には多少あいまいなところもあり、この七太郎の件についてはでっち上げた可能性もあります。そして、謀らずもそれにより助かった人がいます。お内儀」

一真はお松を見た。

「あの日、お前は七太郎が金を届けてその帰りの道をこつそりつけた。そして人気のない、いかにも辻斬り向きな場所で声をかけた。忘れ物だとかいったんだろ。振り向きざまに懐刀で刺したんだ。そして何食わぬ顔で戻つてのうのと過ごしたんだろ」

違うか、と一真は言った。

「何を根拠にそんなことが」

お松は顔をゆがめた。

「欲の皮が突つ張ると怖いもんだ。人を刺した刀を質に入れるなん

て。きれいにふき取ったつもりだろうけど、後々錆が出て売り物にならなかったって質屋が言っていたよ」

兵庫が質屋から借りた帳面を取り出した。

「古いものだがあんたの字だろ。この証文」

「そんな。おつ母さんが、七太郎兄さんを殺したって言うの」
お園が青い顔でつぶやく。

「お園、お前も覚えてるんじゃないか。お松がああ夜外に出て行ったことを」

そういわれて何かを思い出したようにハツとし、お園は口元を押さえた。

そして、声を殺して泣き始めた。

「七太郎だけじゃない、おそらく自殺と処理されたお且もお前がやったんだろ」

太郎衛門がぎょとした表情でお松を見た。

「首吊りだということになっているが、その直前に二人が争っている姿を目撃されている。お且はお前が七太郎殺しとわかったんだろ。たとえば分かっていなくても、お前の用事で七太郎は出掛けたんだから逆恨みだってされたっておかしくない。勢い余って首を絞めたんだ。それを工作して納屋で首をつっているように見せかけた。違うか」

一真は続けた。

「実際、七太郎とお且が死んで特をしたのはお前だけなんだ。おかげでお前とお園は表でのうのうと暮らしている」

一真の言葉にお松はハツと笑った。

「何を根拠に、そんなこと。お且を殺した証拠でもあるって言うのかい」

苦々しげにお松が一真をにらんだ。

これはしかし、一真の勇み足であつた。

確たる証拠は何もなく聴取で吐かせることしか道はなかつた。

中尾が心配そうに一真を見た。

「証拠はあるのか」

そのとき、おりんが横から言葉を入れた。

「ございます」

皆が一斉におりんを見た。

「納屋にお松様のお名前があります。私が数年前に納屋に置かれていたときにそれを見かけました。おそらく死ぬ間際にお松様の目を逃れ書かれたでしょう。簪のようなもので書いた引っかき傷でしたので、お且様の形見の簪と照合させてみてはいかがでしょうか」
おりんの証言に、お松は悲鳴のような罵声を浴びせた。

「なぜ、それをいわなかったのか」

太郎衛門が叱責するように言った。

「いえば、太郎衛門様はどうなされましたか？お松様を離縁して、お園さんも追い出して、そうして栄屋を一人寂しく切り盛りするおつもりでしたか」

おりんの目に涙が滲んだ。

太郎衛門の戸惑いは皆にも伝わるほどに大きかった。

「わしはお松とはもう一緒におれん。全て裁きに任せるよ」

太郎衛門はお松の罪を認め、自分の非も認めるように中尾の前に出た。

「よし、大堀。納屋にいけ。簪と照合してこい。それから、板倉は罪状の確認に走れ。娘の監禁の容疑は栄屋本人にもある。この夫妻をひつとらえるのだ」

中尾が指示を出し、一真は縄を手を持った。

「お待ちください。太郎衛門様へのお咎めはなにとぞ取り下げを」
おりんは手をついた。

傍にいた安次郎が慌てておりんを起こそうとした。

「こいつはあんたを監禁していたんだぞ。義理立ての必要なんであるもんか」

しかしおりんは首をふる。

「太郎衛門様は、それは兄を憎んでおいででした。私もここに来た初めの日は私怨で殴られもしました。けれど九年間ここに置いていただいて、仕事も食も与えられ私は十分満足なのです。それに、両親ともお縄になればお園さんはどうやって生きていけばいいのですか」

啜り泣きをしていたお園は顔を上げておりんを見た。

虐待をしていた娘に、それも冤罪のようなものなのにこれほどまでに尽くされるとは太郎衛門も思っても見なかったようだ。

「おりん、悪かった。わしが間違っていたよ。九年、九年もの間だ。

文句も言わずにこの扱いに耐えて。わしは、自分が恥ずかしい」
太郎衛門は体を丸めてさめざめと泣いた。

そうしておりんの気持ちも汲まれて栄屋はかるうじて潰されることは免れた。

しかし、安次郎はおりんの太郎衛門を思う気持ちに違和感を覚えるのを感じた。

第四幕 結ばれざる者 其の一

「どうしてもいくのか」

安次郎が寂しそうにそういった。

おりんはうなずいた。

一真の家で仲間内でのごく質素なものだったが、七夕の宴が催されていた。

先日までの、おりんの労をねぎらうつもりで行われた席だった。

安次郎とおりんは夜も更けてなおも盛り上がっている輪を抜けて二人で縁側に座った。

そうして酒を酌み交わしていたときふいにおりんが切り出した。

「鎌倉の尼寺に行くことに決めました。明朝、明け六ツに出発します」

安次郎は驚いて猪口を落としそうになった。

「何で。栄屋はあんに謝ってこれからは娘同様に扱うつていつてゐるのに。それに円満屋だってあんの腕を欲しがっている。いくところなんてたくさんあるだろう」

「いくところなんてないです。私は科人の妹ですから」
そういつてうつむいた。

「栄屋をかばって、さぞいい子とお思いでしょう。けれど、私は自分を護っているだけ」

父母が自害し、兄が磔になった後のおりんの生活はひどいものだ。
た。

家は断絶し財産は没収された。

親戚は誰もおりんを引き取りたがらず、おりんは農家で奉公をすることになった。

しかしすぐに罪人の妹ということは知れ渡った。

毎日のように石を投げられ、引き取り先にも嫌がらせが行く。

拳句には意趣返しとか称して関係のないゴロツキからも斬りかけられたりもした。

「もうお前をおいておくことができねえ」
一年を待たずに奉公先から追い出された。

路頭に迷っているときに通りかかった女衞屋に見初められ再び江戸に戻ったのだ。

「お前は美人だ。遊女の世界できつと大成することだろうよ」
上機嫌で女衞は言うが、おりんは自分の名が知れ渡っている江戸が怖かった。

そんな折、女衞屋にその女を欲しいといってくるものが現れたのだ。
それが栄屋のお松である。

おそらくお松は、おりんの一度だけの証言を聞きつけて不安だったのだろう。

遊郭に売られる倍の値段で栄屋に引き取られた。

太郎衛門はおりんを見るなり仇討ちでもするかのように殴り続けた。
しかしたくさんのあざはできたもののそれ以上の手打ちはなかった。

その後奉行所に駆け込まれないようにとお松から首に鎖をつけられ、隠された針子として飼われ続けていたのだ。

ところがそれは、嫌がらせにあっていたおりんにとってはこれまでにない素晴らしい環境だったのだ。

すっかり隠されているので馬鹿げた意趣返しの手配もないし、仕事さえすれば叩かれることもない。

だからこそ栄屋がつぶれることは望まなかった。

しかし安次郎たちが捕り物に入りお松の悪事の言い逃れができないことを悟ると、お松を切り捨てる方向に考えを変えたのだ。

お松に全て罪を被せて、自分がお園と太郎衛門を救うことで今後に向けて大きな貸しを作ったのだ。

「尼寺にこれからたくさん寄付をしてもらいます。私はそれだけの貸しを作ったのですから」

寂しく笑った。

「私、汚い女なんですよ」

安次郎は星を見上げた。

「それだけじゃないだろ」

「え？」

「あんたが文句も言わずに栄屋に奉公していた理由だよ」

おりんの顔色が青ざめた。

「10年前の七夕の日、木山小次郎の磔が行われた。記録によると

縛られた小次郎は、死ぬ間際まで女の名前を叫び続けたらしい」

「やめて」

おりんが耳をふさいで背を向けた。

「やめて。兄のことは、もう忘れたいの」

安次郎はおりんの肩に手をかけそばに寄せると静かに言った。

「忘れられてないから、今つらいんだろう。随分探してあんたんちに勤めていた女中から聞いたんだ。木山小次郎はおりんを愛していた。そうだろう」

おりんの黒い瞳にうつすらと涙が浮かぶ。

「話してくれよ。誰かに言えば少しは楽になるから」

そう促され、やがておりんはぼつりぼつりと話し始めた。

「あに様は私のせいで人斬りになったの。私が、あに様の気持ちに答えられなかったから」

結ばれざる者 其の二

小普請組の木山家に深い溝が生まれたのは小次郎が十八歳、兼ねてから持ち上がっていた縁談がほぼ決まりかけた頃だった。突然小次郎はこの縁談を取りやめたいと言い出したのだ。

両親は困惑した。

しかし、その理由を聞いてますます驚いた。

小次郎は妹の厘が好きだったのだ。それも、どうしようもないほどに。

そう告げられた厘の動揺は大きかった。

当時七歳、非常識ともいえる兄のこの気持ちをどう扱ったらいいのかもわからない子どもであった。

そしてその日を境に家族はどこかよそよそしくなった。

特に厘は兄を避けた。

そうして奇妙な空気が続いていたある晩、小次郎がついに崩れた。

夜中、何かの気配に厘は目を覚ます。

同時にふすまを開けて厘の元に小次郎が近づいてきた。

その手には、抜き身の刀を携えている。

恐怖で厘の体が凍りついた。

暗くて顔は分からないが兄の形相がいつもと違うというのはおぼろげに分かる。

「厘、後生だからめに様を避けるのはよしてくれ。俺はどうかなり

そうだ」

押し殺したその声に哀願が漂う。

そして次の瞬間、厘の手を掴んだ。

「いやあっ」

厘は、手元にあった枕を投げた。それにひるんだ隙に父母の寝ている部屋に駆け込んだ。

後の記憶はおぼろげだ。

母が兄をなじる。

父が刀を抜いた背中が見える。

兄は。

兄は、咆哮するとふすまを切り、柱をきりつけ、そのまま外に飛び出した。

明け方戻ってきた兄は、血を被っていた。

以来、兄は心を患い、妄言を言うようになった。

それだけではなく夜中になると刀を持ってふらふらと出て行く。帰ってくると必ずどこかに血がついていた。

家人の目にも、小次郎が人を切っていることは明確だった。

「結局三人という扱いになっただけはいますがもっと殺されているはずですよ。私たちはどうしようもなく見ていることしか敵いませんでした。けれど、あの日は違ったのです」

夜になって出て行っただと思われていた小次郎は何を思ったのか引き返すと、庭の隅にある草むらに寝転がった。

厘がその姿を見つける。

星がきれいな穏やかな夜だった。

厘は小次郎に近づいた。不思議と怖い感じを受けなかった。

小次郎は厘に気づくと声をかけた。

「見ろよ。天の川だ」

厘も草むらに寝転がった。

「あれが牽牛だ」

星を指刺す兄は以前の優しい兄のままである。

「あれが、織女星」

厘は起き上がった。

「あに様。夜に出掛けるのはおやめになって」
今しか言うことはできないと思った。

しかし、小次郎はそれに答えずに星の話続けた。

「星の二人は年に一度七夕の日に川をわたって逢瀬するんだ」

小次郎は星空を指でなぞってつぶやいた。

「皮肉なものだ。年に一度しか会えない二人より俺は好きな奴と毎日いるというのに、手も触れられない」

小次郎は溢れ出した涙を腕で隠した。

「厘よ、お前にはさぞかし俺が滑稽で異常な奴に見えてることだろう。でも本当にどうしようもないんだ。お前が恋しい」

厘は胸が痛んだ。

「あに様の気持ちには厘はこたえられません。厘は、妹なの」

言いながら、嗚咽がこみ上げてきた。

妹というだけではなく、厘は恋なんていうものすら知らない子供である。

「分かってるさ、一緒になろうとしているんじゃない。ただ、いつものように俺の近くにいただけでよかったのに」

地面を叩いて小次郎が起き上がった。

「お前に拒まれたとき俺は全て失った。木山の家も、親ももうどうなったっていい。俺はもう、以前のようにには戻れない」

さらに小次郎は厘にこう言った。

「俺がこんなになったのはお前のせいだ。俺が人を切るのも、木山の家を潰すのも」

厘には十分すぎる呪いであった。

もし、あの夜厘が兄を拒まなかったら兄は人殺しにはならなかった。何もかもが元のまま、皆普通に暮らせたのだ。

数日後、辻斬りに出た兄はそのまま捕らえられた。

「磔は、それは惨いものでした。私はそれも残された自分の使命だ

と思い見に行きました。でも、あに様は群衆の中から私を見つけ出して、厘、厘って、絶命するまで・・・」

ふいに安次郎がおりんを抱きしめた。

「七太郎の件が冤罪だとわかっていても、兄がそれも自分の罪だといったから受け入れたんだろう。あんた、兄から受け取った重荷を背負いすぎなんだよ」

あやすように安次郎は背中をポンポンと叩いた。

「泣けよ。今まででつかい声で泣いたことすらないんだろ。すつきりするぞ」

十年分の思いが堰を切ったようにこぼれ出す。

安次郎の胸のうちに喉がかれるまでおりんは泣いた。

「七夕は嫌い。あに様の声がする気がして
まだ少しぐずるように、おりんが言った。

「一人でいるとつらいだろう」

「もう、一人には慣れました」

顔を上げて、はればったくなった目をこすった。

「来年も、一緒に天の川を見よう」

そういった安次郎の言葉に噴出した

「私、これから尼寺にはいるというのに」

「でも一緒に見ることはできるだろ」

おりんは首をかしげた。

「だからさ、場所は違っても天の川は江戸でも鎌倉でも一緒だろ。七夕の日、俺は四ツの時に天を見る。そしてあんたのことを思い出すよ。約束する。これから年取っても、子孫ができて俺はずっとあんたを思い出す」

そう思えば怖くないだろ、と安次郎は笑った。

おりんはまた安次郎の胸に顔をうずめた。

やがて、おりんを呼ぶ声が奥から聞こえてきた。

「おりん殿、板倉殿がきたぞ。ご挨拶なさい」

一真の父、時宗に呼ばれておりんは晴れ晴れとした声で返事を返した。

立ち上がり奥へ向かう途中、安次郎にありがとうと微笑みかけて去っていった。

終幕

「よお、色男」

おりんと入れ替わりに2人の悪友が縁側に腰掛けてきた。

「うちは野原の一軒家じゃないんだ。あまり女を泣かせるな。俺が近所から勘違いされるじゃないか」

一真はそっぴいながら安次郎に勺をした。

「折角、余韻に浸っていたのに。邪魔するなよ」

安次郎は少し顔を赤らめながらじろりと睨んだ。

「おりんは明日鎌倉に出立するそうだ。尼寺にはいるらしい」

安次郎がそう教えると、兵庫がもったいなさそうな顔をした。

「まだ若いのに。おい安。何で引き止めないんだよ」

安次郎は返事をせずに酒をあおった。

「好きではなかったのか」

一真が問うと、安次郎が露骨に嫌な顔をした。

「野暮だな。そういうことはきくものじゃない」

それでもなお不満げな顔の兵庫をみてふうつとため息をついていた。

「あの娘は、嫌な思い出の江戸を離れて両親と兄を弔いたいんだろ。それを止められるはずもないじゃないか。それに、おりんは俺のこと、そんなに想ってはないだろうし」

へえ、これまた意外といった顔で二人が安次郎を見た。

「最初の接吻のとき、怒りも喜びもしなかったんだ。ただ困った顔をしていた。今だってそうだ、恋する女というよりあれは妹だ。もしかしたら、俺を兄と重ねていたのかもしれないな。相手にその気がないんじゃないよ。俺は、片思いは嫌なんだ」

安次郎は格好をつけてそう言った。

「若造共、お手柄だったな」

吟味方の板倉が三人のところにやってきた。

慌てて向き直ろうとする三人を制して自分も座り込んだ。

「栄屋は存続だが、お松はまだどうなるか決まっていない。何しろ古い事件だから時効も考慮されて時間がかかりそうだ。それよりお前たちの褒美の件だが」

褒美と聞いて三人は色めきたった。

「過去の事件を二つも解決してその犯人を無傷で捕らえたことは褒章ものだ。しかし、だ。今回の無謀ともいえる押し込み捕り物をたつた三人で行ったことはいかなものか、と中尾様がおっしゃっていたぞ。よって賞罰相殺で何もなし。まあ、そういうことだ」

直にそういうお達しがあるだろうと、無謀な若者たちを楽しそうに眺めて戻っていった。

「俺、けっこう期待していたのにな」

兵庫がしょんぼり言った。

「俺も存外に物入りだった。調べてもらった目明し達にも結構な金を払ったし」

嫌味たらしく財布を見ながら一真も言う。

「結局、得をしたのは安次郎だけか。縁談もなくなって、可愛い女の子も救って。今回は安次郎のために働いたようなものだよな」
兵庫は横目で安次郎を見た。

「しょうがねえな。酒でも寿司でも奢ってやるよ。でもな、おれも今回のことでじいさまにしばらく小遣いもねだれないんだ。手加減しろよ」

安次郎は苦笑した。

なおも縁側に据わっている安次郎に明るい女たちの笑い声が聞こえてきた。

飾り付けられた笹の下でおりんは素麺を食べ、大きな西瓜に歓声を上げる。

数ヶ月前には考えられなかった光景だった。

さらりとゆれる黒髪のおりんは見違えるように明るく、星のように輝いていた。

安次郎は西瓜を食んだ。

指をつたって落ちていく青臭い果汁はやがて庭の暗がりにはポツリと落ちて消えた

終幕（後書き）

お付き合いいただきましてありがとうございます（＾－＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3888m/>

七夕おりん～新米同心3人衆の受難～

2010年10月9日20時51分発行